

第 3 回全国ピアスタッフの集

い「分科会報告書」

★分科会 I-1 「ピアスタッフがひとり職場で働き続けるために」

○担当 竹内 古関 廣田 飯山

○参加者数：12 名

○内容の概要

前半

シンポジウム 古関 廣田 飯山

シンポジストが自らの経験（ひとり職場のピアスタッフ）を語る

1 人 10 分から～15 分

後半

グループワーク

参加人数が少なかったため 2 グループ

古関 ファシリテーター

廣田 ファシリテーター

○感想

参加人数は少なかったが、中身の充実した分科会になった。

シンポジストのひとり職場で孤軍奮闘しているピアスタッフで勤続年数 10 年以上の方もいて、どうしたら続けていくことができるかの参考になったと思う。

グループワークではメンバーとしての立場と、スタッフとしての立場での葛藤を話された方や、大学院で学ばれている方の話などがあった。

いろいろな立場でピアスタッフとして職務に従事されていて、皆さん自分なりに工夫をされているという感じであった。

職場の環境(処遇や人間関係)についても、どうしたらうまくやっていけるかは経験が大きい

な要素になっているように思われた。

文責 飯山 和弘

★分科会 I-2 「働き続けるための自分との上手な付き合い方、職場との付き合い方」

○担当実行委員：引地はる奈、今川亮介

○参加者数：36 名

○内容の概要：ワークショップ形式で行う。

テーブルを 6 つ設置し、グループワークを中心に行う。流れとしては、実行委員自己紹介、実行委員からの発表のあと、グループワークに。グループの中でファシリテーターを決め、

- ① 自己紹介②ワーク：働き続けるための自分との上手な付き合い方（模造紙に付箋で意見を出し合う）③ワーク：働き続けるための職場との上手な付き合い方（模造紙に付箋で意見を出し合う）<休憩>
 - ④各グループの発表⑤全体のわかちあい、質疑応答
- で、実施しました。

○感想：ピアスタッフとして実際に働いている人、目指す人、雇用側の人などが参加されていましたが、身近な話題だったので、活発に意見が交わされていました。

ピアスタッフを続けることの意義、どうやったら続けられるのか、無理しすぎない働き方とは？、社会的なミッションとして、また、自らの体験談の中から、苦しさからのリカバ

リー、セルフケアの重要性などが話題になりました。

★分科会 1 - 3 「長期入院者のための地域移行」

○担当実行委員

司会：中林澄明、記録：塩田由美子、発表：志賀滋之

○参加者数：24名

○タイムスケジュール

10：00～10：05 自己紹介（名前・所属）

10：05～10：20 アナウンスメント志賀「現場での戸惑いとジレンマ」

10：20～10：35 アナウンスメント中林「地域で暮らすためには退院はゴールではない」

10：35～10：40 中林・塩田・志賀「公開ディスカッション」

10：40～11：20 グループワーク

11：20～11：45 グループワークの発表

11：45～12：00 全体のまとめ

○グループワーク各班まとめ

Aグループ（5人）

地域移行の存在を知らない。

長期入院の患者さんとピアスタッフの関係性。

地域移行を押しつけない。

幸せって何？地域で暮らす？とは何かを利用者と明らかにする。

病院で暮らすというのも選択としてありで、退院するだけではない。

地域移行の存在を知らない方々に、外で暮らす選択肢があることを報せる。

Bグループ（4人）

自らの体験談を伝えたい。

地域で暮らす楽しさを伝えたい。

できるなら“ピアが”気楽に病院に行って、話せるように。

スピーチは、継続してやるべき。

ピアがもっと自由に病院に入れるように、仕組みを作る。そこでお客様扱いされるのは課題となる。

訪問の間隔を空けないで週一は行き、OTに入るのも方法。

病人に病人の世話はできないと思われる病院側の偏見。

決して病院の外が楽しく幸せではないけれど、退院したあとに苦労する喜び楽しさを伝えたい。

Cグループ（6人）

現状ピア2年目。

病院側と地域の連携が大切。

当事者をもっと元気に。

病院側がオープンになりピアを受け入れて。

病院にどう入ったら良いか？病院内にピアがスタッフとして入る。

病院職員が地域を知らない。病院は勉強してほしい。

出来ないことでなく、出来ること考える。

Dグループ（5人）

長期入院の友達がいて参加した。患者さんはスタッフに、もてはやされたい（認められたい）。

患者さんは、運転免許が欲しいが服薬や病状の関係でなかなか取れない。

教習所にスタッフが一緒に行ってチャレンジしてほしい。

障がい者にとって、スタッフにはお世話になっている意識がある。

ピアにはお疲れ様と言い、スタッフには、ありがとうございますと言う。

スタッフから見ると、これに違和感を感じる。

どうしたらいいだろう？

Eグループ（6人）

現場の取り組み感じることをピアが病院で勤務したらどうか。県の事業で病院におく。地域にいらして行くなかで、どうやって、ピアサポーターを巻きこむか。

○長期入院患者のための地域移行についての中林総括

人生に、答えはひとつじゃない・・・！

地域に持ち帰って課題点をそれぞれ整理と気づきのヒントにして頂きました。

★分科会 I - 4 「ピアスタッフの雇用とニーズ」

○担当： 佐々木 理恵、磯田 重行、川村 有紀

○司会： 佐々木理恵

○シンポジスト： 磯田 重行、長岡 千裕、有川 雅俊、川村 有紀

○参加者数： 29名

○振り返り記録担当： 佐々木・川村

○タイムスケジュール

1000～1010 分科会趣旨説明・企画者紹介

1010～1045 シンポジウム シンポジスト4人から、1人ずつ話題提供

1045～1110 シンポジスト同士での質疑応答・会場からも意見を頂く

1110～1120 休憩

1120～1155 分科会参加者全体での意見交換・質疑応答

1155～1200 分科会まとめ

○内容の概要

自身の病の経験、困難な経験を活かして働くピアスタッフの雇用は年々増加しつつある。そのような中で雇用する側、される側は共に働く仲間としてお互いにどんな事を望んでいるのか、また、協働において自分にはど

のようなことができるのか。協働する上で悩み葛藤する場面も様々でそれぞれの立場からのみえていること4名のシンポジストからの話題提供頂きその後、会場から様々な立場の方よりご発言いただいた。

当初、グループワークの時間を設けていたが、会場全体でシンポジウムの内容を深める必要性を感じたため、予定を変更し会場全体で意見交換をおこなった。

○感想

全体で活発な意見交換の見られた分科会だった。

シンポジストがピアスタッフのみならず、ピアスタッフと一緒に働いている方、ピアスタッフ雇用したいと思っているがまだ悩んでいる方等、様々な立場の方がいて、それぞれの立場から率直な思いや体験談、語りがありそれが会場からの意見をよりだしやすくなったのではないかと思う。また雇用したい・している立場にとってピアに対して期待すること・ニーズが医療・福祉の場において違う点も興味深かった。勿論シンポジストからの声とは違った考えもあるのを考慮したうえで、「何をピアに期待しているか」が聞けたのは有意義だったかと思う。そしてピアスタッフと言われる人達の中でも雇用側に立つものも少なからず出てきていることが分かったのも大変意義深く、この先の課題や来年度の企画へ繋げていくことが出来そうな分科会となった。

★分科会 I - 5 「ピアスタッフの現状と課題～研修・資格化・専門家との協働など～」

・相川さん

現状 共有すること。8年前から研究を始め

た。50人のインタビューとアメリカのピア
スペシャリスト50名のインタビューを実施
した。ピアサポーター講座等を開催し、地域
性がある。人と人との繋がりが、地域によっ
て異なる。今川さんの発言は、日本の現状と
課題だと思っている。環境が大きい。力と可
能性とリカバリーを信じているかどうか？
共同が必要だ。変化をもたらすもの、主体性
を戻していくことが肝心。その際、関係性が
壁になってくる。支援するひと、される人共
に、共同の可能性を信じること。
ピアサポーターはリカバリーが前提。最後に
ピアサポーターの定義は、それぞれの定義が
できる。

課題 真の傾聴、共感がニーズを把握でき
る。自分らしい人は、共同からえられるポジ
ションを確立していた。皆がシステムを作っ
ていく必要があり、チームの一員としてチー
ムをつくる必要がある。二重関係、多重関係
が出てくる。就労関係では、ポジションが確
立されていない、利用者としての保障がなく
なる。専門性では、個人的な経験が不安、環
境では、リカバリーを信じていない。葛藤が
生まれる。それぞれの二重化では、多重関係
に置かれる。倫理、葛藤があることを認識す
る必要がある。役割では、満たされなかった
ニーズをピアサポートが生み出すか。環境要
因がピアサポートをつぶす理由の7つのうち
の1つである。

・濱田さん

ピアサポートカンファレンス

2004年4月設立、10周年記念に参加
大会のテーマ 変化する専門職

研修 アートのプログラムと日々の実践

オンライン教育、ニューヨーク州のオンラ
インコース

設置36州

安定して発展している。誰にでも開かれた
教育

・関口さん

ニュージーランドの報告

2004年から実施

2007年 RAC

メアリーオーランド 当事者、国際団体の
世界の議長

ドンマーオイ、ニュージーランド出身

障害者権利条約 権利の主体が変わった。

当事者、利用者のリーダーシップ

・グループワーク

ピアスタッフに仕事をまかせてもらえない。
研修がない。ネットワークがない。

収入が不安定、雇用の不安、新たなポジシ
ョンをどう確立していくか。

★分科会Ⅱ－１「セルフヘルプグループ」

・市川さん

オリオンはポプリと深い繋がりがある。2009年11月ひとりぼっちをなくそうということで、4人体験発表があった。川越市役所、社会福祉協議会、保健所、事業所と2009年8月役員会に参加。当事者会は3人いればできるということで、2009年12月オリオン発足、会表を務める。

活動内容 公民館を事業所に予約してもらった。通っている人は東武東上線沿線、正式会員5名、第二日曜日の11時～13時に開催。フリートークが中心、女性のみ。女性だけしか話せない話を中心。女性だけでオリオンをやっていききたい。会費は月100円、1年分だと1100円、一年分はらってもらう。

・澤田さん

25年前に教会で心の病の会を立ち上げた。18年前病院では仲間との語らいがあった。クラブハウスで急に元気になった。メンバー同士の支援がきっかけだと思う。

当事者活動の失敗は規約作りがまとまらず、解散。青梅は当事者だけ。今年度から1, 3, 5の土曜日。年10数回レクをしている。

ビジネスグループ、賃金は500円～1200円、ハウスクリーニング、介護同行等をしている。ぶーけでリリー賞受賞

ピアサポートグループの研究の文研がないので、博士論文をピアサポートグループにした。

・グループワーク

現状

興味ある人が集まるが、どうしていいかわからない。モチベーションをどう保つか。

セルフヘルプグループの選択しが少なく、選べない。

立ち位置が違うメンバーだったが、話しているうちに打ち解けた。

課題

ピアサポーター同志のセルフヘルプグループを考えている。

グループの広報活動をして知ってもらう。

活動の場所を定期的にとれない。

将来の展望

小さいグループを大きなグループにした

い。
メンバーの主体性を尊重しつつ、責任を分かちあって運営していく。

等々、グループワークが活発に行われました。

★分科会Ⅱ－２「ピアスタッフの今とこれから」

○担当実行委員

飯山 和弘（後半進行、対談形式での発表）

中林 澄明（PPを用いての発表）

関口 明彦（まとめ）

引地 はる奈（前半進行、対談形式での発表）

○参加者数：約50名

○タイムスケジュール

前半

13:00～13:05 挨拶と趣旨説明

13:05～13:20 「ピアスタッフの今とこれから」（中林）PP使用

13:20～13:35 対談形式での話（飯山、引地）

13:35～13:50 質疑応答

13:50～14:00 休憩

後半

14:00～14:30 グループワーク

14:30～14:50 各グループの発表

14:50～14:55 まとめ（関口）

14:55～15:00 担当実行委員より感想（中

林、飯山、引地)

○ 内容の概要

前半

まず、「ピアスタッフの今とこれから」について、中林がPPを用いての発表を行った。続いて、「ピアスタッフになるまでの経緯」、「ピアスタッフとして働いてみてのやりがいや苦労」、「ピアスタッフの今とこれからについて思うこと」などを、飯山と引地が対談形式で発表。その後、質疑応答を行った。

後半

1 グループ 5 人程度で 9 グループに分かれ、グループワークを行った。グループの進行役は、各グループで決めてもらった。「ピアスタッフの今とこれから」について思うことを自由に話し合い、付箋を用いながら整理し、模造紙にまとめてもらった。まとめたものを、グループの代表者が発表。

最後に全体のまとめと感想を実行委員が話し、分科会を閉じた。

○感想

本分科会は、申し込み時点で参加者が 50 名以上いる状況だったが、今回はあえて人数制限をせず、興味を持ってくださった多くの方にご参加いただくことにしていた。当日、ふたを開けてみたら、申し込みよりは若干少ない人数だったように思う。人数が多いことによる大きな支障はなかったが、グループワークの発表の際、9 グループの代表が発表し、グループワークの内容を共有するには時間的に厳しかった。ただ、グループワークの進行役がどのグループもスムーズに決まり、活発な意見交換がなされていたこと、前半の質疑応答でもたくさんの質問をいただけたことなどから、とても有意義なものになったのではないかと思う。

みなさんの発表などから、現在、点在しているピアスタッフが、今後は連携してより力を発揮できるように、交流や学びの機会を増やしていくことが重要であると痛感した。ピアスタッフのこれからは希望をもてる分科会だった。

★分科会Ⅱ-3「これからピアスタッフを目指す人のための集い」

○担当実行委員：磯田重行、西村聡彦、今川亮介

○参加者数：37 名

○内容の概要

13：00-13：05 あいさつ

13：05-13：20 実行委員からの発表

13：20-13：30 質疑応答

13：30-14：30 グループワーク

14：30-14：55 意見の共有

14：55-15：00 余韻

○感想

実行委員からの体験談に基づく発表のあと、「なぜ自分はピアスタッフになりたいのか」「そもそもピアスタッフとは何か」というような話を中心にして各グループで自由に話し合ってもらいました。

まず、付箋に自分の意見を書く個人ワーク、共有するグループワーク、各グループから全体に共有する発表を行いました。

この分科会でも、現在ピアスタッフの人、なりたい人、雇用側の人など、さまざまな立場の人が参加され、いろんな視点から意見が交わされていました。

あるグループでは、「なぜ自分はピアスタッフになりたいのか」と「なぜピアスタッフを雇用したいのか」を並立させて議論したグループもあり、興味深く思いました。

★分科会Ⅱ－４「ピアスタッフと恋愛・結婚」

○担当：古関 俊彦、川村 有紀

○参加者数：30 名（程度）

○タイムスケジュール

13：00～13：10	開会・分科会の主旨説明 ファシリテーターの自己紹介
13：10～13：40	GW ・チェックイン 「名前（呼ばれたい名前も可）」 「私の好きなラブソング」 ・ワーク 「私が恋愛で大切にしていること」
13：40～14：00	GWの分ち合い。
14：00～14：10	休憩（10分）
14：10～14：30	ピアスタッフによるスピーチ
14：30～14：45	質疑、感想等
14：45～14：50	まとめ
14：50～15：00	閉会（その後自由に交流）

○内容の概要

精神の病や障害に対する誤解や偏見、あるいは自分自身の内なる偏見（セルフスティグマ）により、恋愛・結婚をあきらめてしまう当事者、恋愛・結婚に対してネガティブなイメージを持っている専門職は少なくない。しかし、果たして実際にピアスタッフとして働きながら恋愛・結婚をしている人たちの現状はどうなのだろうか。

本分科会では、現在ピアスタッフとして働く人たちの恋愛観、特に恋愛において大切にしていることについて取り上げ、グループワークを通して互いに分かちあい、次に現在ピ

アスタッフとして働いている分科会担当者より、仕事と結婚生活（ワークライフバランス）についてスピーチを行う。

○感想

精神の病や障害を持つものの恋愛・結婚には、まだまだ世間の誤解や偏見、また内なる偏見（セルフスティグマ）がある現状が明らかになったが、グループワークや結婚をしているピアスタッフの語りを通して少しでも希望を持って帰られた方が多かったようであった。

グループワークはワールドカフェ方式を取り入れたが、短時間でグループワークの内容をシェアするのに便利であったが、初めての試みであった参加者が多く、その手法に戸惑っていた様子も見られた。

今後、働きながら結婚生活を送るピアスタッフ、またはそれを目指すピアスタッフのあり方を模索する場として継続して行う必要があると思われる。また、分科会参加者より、来年もこのテーマを設定してほしいという要望が多数あった。

★分科会Ⅱ－５「WRAPの集い」

○担当：佐々木 理恵、

○司会：佐々木理恵

○シンポジスト：佐々木 理恵・佐藤 由美子・堀内 美咲・上野 康隆・藪田 歩

○参加者数：26名

○振り返り記録担当：佐々木

○タイムスケジュール

1300～1010 分科会趣旨説明・企画者紹介

1310～1315 WRAPの概要

1315～1345 シンポジストひとりずつからの話題提供

- 1345～1350 グループ分け
1350～1355 休憩
1355～1425 グループワーク＜WRAPのキー
ーコンセプトを深めよう＞
1425～1440 全体シェア ～島巡り～
1440～1455 全体シェア ～対話を通し
て～
1455～1500 分科会まとめ

○内容の概要

WRAP（※ラップ Wellness Recovery Action Plan：元気回復行動プラン）のリカバリーに大切な5つのキーコンセプト「希望」「自分の責任」「学ぶこと」「自分の為に権利擁護すること」「サポート」を中心に、リカバリーの過程を対話の中で深めていく。WRAPファシリテーターらからの話題提供をし、それらから広め深めていくことをした。

○感想

部屋いっぱいになるほどの参加者が集まり、WRAPファシリテーター・WRAP初めての方・WRAPに触れたことがある、また当事者・支援者など様々な立場の人が集い立場を超えて共に人生を生きるピアとして意見交換しリカバリーの過程を深め合った。

立場が違えば見えているものも違いそれが混ざり合う事であらたな発見やリカバリーに必要なこと・ものが見えてきて大変有意義な時間であったと共にWRAPを通じて新たなサポート関係をつくる仲間作りの場にもなったように思う。なにをもってリカバリーとするか。この企画では専門職・当事者が混ざり合いリカバリーの過程をWRAPのキーコンセプトをベースに話せた企画になったかと思う。